様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０２２７

研究課題名（和文）多様な看護提供の場に応用可能な看護技術のコアの教育に関する研究

研究課題名（英文）Core nursing techniques can be applied to a variety of nursing care settings

研究代表者
中村　順子（Nakamura, Yoriko）

秋田大学・医学系研究科・非常勤講師

研究者番号：３０４６９４２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：病棟だけでなく地域在宅など看護提供の場が拡大している今日、どのような場にあっても応用可能な看護技術のコアを明らかにする研究を行った。特に清潔のケアについて、訪問看護師のケア提供場面の参加観察とインタビューをデータとして質的に分析を行い、基礎看護領域の研究者とのディスカッションを行って５つのコア（概念）を抽出した。これらの概念はどのような場面で看護を提供する場合においてもその中核となることを、看護基礎教育の中で教授していくことが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地域包括ケアシステムのもと療養の場は急激に拡大しており、看護提供の場も多様となる中、どこで看護が提供されても一定の水準の看護ケアが求められる。従来看護基礎教育では病棟看護（Bed side nursing)がベースとなってきた。これからは多様な場で応用展開される看護ケアの教授が求められるが、その際のエビデンスとなりうることが学術的な意義である。また、国民がどのような場においても水準の高い看護をうけることができることは社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：We conducted research to clarify the core of nursing technology that can be applied in any setting, not only in hospital wards but also in community homes. In particular, with regard to hygiene care, we conducted a qualitative analysis of the data collected from participatory observations and interviews of home-visit nurses providing care. It is expected that these concepts will be taught in basic nursing education so that they form the core of nursing in any setting.

研究分野：地域在宅看護

キーワード：看護基礎教育　看護技術　多様な療養の場

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2013 年 8 月、これからの日本の社会保障制度の道筋を示す「社会保障制度改革国民会議報告書」が発表された。報告書では「病院完結型」から「地域完結型」への医療の転換が明記され、医療・介護の一体改革を行いながら地域ごとの地域包括ケアシステム作りの推進を求めている。

これに先立ち国は団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年をめどに地域包括ケアシステムの構築を実現すると宣言、介護保険第 5 期計画でも示されていた地域包括ケアシステムの構築を一層明確にするため 2015 年度から始まる第 6 期計画を「地域包括ケア計画」として在宅医療介護連携等の取り組みを本格化するとしている。法律の整備に伴い来る 2025 年に向けて病床の再編が地域医療構想として動き出し、2025 年までには全国で 15 万床の急性期病床の削減が謳われ、合わせて亜急性期、長期療養型、居住型、在宅という生活の場がベースとなる医療提供の場が増加、看護師の働き場の中心は急性期病床から生活の場へとシフトしていくことが予想される。

一方特定機能病院を始めとする高度医療の提供機関は、医療の進歩と様々な機器の進化、感染対策を始めとするリスク管理などの要因から、清潔操作や清拭などに代表される看護技術は基礎教育で教授しているものと乖離がみられていると言われており、病院の看護関係者側からは実態に即したものの教授の要望があるとも言われている。

このように看護提供の場が広がりを見せる中で、応用可能な最も基本となる看護技術のコアは何だろうか。その技術の根幹となる根拠は何かを押さえつつ現場に対応していくためには、どのような内容、方法で教授すべきであろうか。2025 年問題を控えた今こそ、高度急性期病床にだけ対応が可能であったり在宅領域だけに対応が可能であるようなものではなく、応用を可能とさせるその根幹となる看護技術（看護技術の幹細胞とでも呼ぶ）の検証と提案が求められていると思われる。現在に至るまで多様な場において求められる看護技術に関連する先行研究はほぼ見られず、この研究を行うことは日本の看護の将来に向けて必要であると考える。

２．研究の目的

多様な場における看護の提供が進む中、看護基礎教育の教育内容の検討を目的として訪問看護師の看護技術のコアを抽出することを目的とした

３．研究の方法

訪問看護師の看護提供の場面の参加観察とインタビューを分析する質的研究

訪問看護師 11 名、利用者 14 名の訪問に同行してデータ収集を行った。観察後「なぜその方法を用いたか」「その方法の習得は基礎教育だったか」を中心にインタビューを行った。看護技術の定義を「テクニカルスキル（手技）のことだけでなく、対象のニーズに合わせて必要なことを判断し提供するケアのすべて」と定義した上で、その視点に沿ってコ

ードとなる文言、文章を抽出し、基礎看護領域の研究者と地域在宅領域の研究者が討論の上空間配置し、抽象度を考慮して質的に分析した。

【用語の定義】

看護技術のコア；その看護技術の中核となる考え方・根拠と手法

【倫理的配慮】

研究者の所属機関の倫理委員会の承認を受けている。

４．研究成果

分析の結果 5 つの大カテゴリー、11 の中カテゴリー、33 の小カテゴリーが、抽出された。訪問看護師は、30 分から 1 時間程度という限られた時間内に療養者・家族から情報を得るなどしながら、必要な清潔のケアを提供していた。ケアの内容は、清拭・部分清拭・口腔ケア・陰部洗浄・洗髪などであった。

清潔のケアの提供にあたり、［利用者に危害を与えない］よう細心の注意を払いつつも、専門職として［感染予防の視点を持つ］行為を怠らず、【安全にケアを提供する】ことを行っていた。また、［心地よさを大事にする］、［尊厳を守る］という【安楽にケアを提供する】ことも、どの看護師も重視していた。〈乾タオルで水分を取りしめったままにしておかない〉、〈保温を心がける〉などきめ細かい配慮と手法が守られていた。

また、時間内に訪問目的を完結させるという特性上［限られた時間を有効に使う］だけでなく［限られた空間を上手に使う］ことで療養者自身の負担の軽減もはかり【効率性を考え様々な負担を減らす】ことを行っていた。

訪問看護師は対象の〈経済事情を把握している〉ので、〈節約して物品を使う〉、〈代用できるものは代用する〉などして【経済性を常に考慮】していた。

また、〈できる事は自分でしてもらう〉など［自立支援の視点を持つ］ことや［介護者の方法も尊重する］、〈家庭に合わせたごみの分別廃棄を行う〉などして［介護者の労力の軽減を図る］など、ケア提供者が看護師だけではなく日常の介護が介護者によって行われることを十分に踏まえたケア提供を行っていた。更に在宅ではヘルパーなどの他の職腫も関わっているため、〈連絡を取り合ってケア内容を決める〉、〈連絡ノートを使って情報共有を行う〉などして［多職種とのすみわけをする］ことを行っており、これらのことは家族や多職種が関わり、在宅療養が継続されることを念頭にした【継続したケアができるようにする】ことであった。

【考察】

訪問看護師は【安全にケアを提供する】【安楽にケアを提供する】ことを重視して清潔ケアの主たる目的を果たしていた。濡れた皮膚を乾タオルでぬぐい皮膚を乾燥させたり、露出を最小限にするなど、基礎教育で学んだと思われる事項をきちんと実行していた。看

護師自身はその方法をどこで学んだかという自覚がない者も多かったが、明らかに体に染みついた基礎教育のなせる業と思われた。湯とタオルを使う清拭は在宅では比較的行われており、基礎教育がそのまま活かされている部分であると考える。
次いで、在宅での看護は、介護者が日常的に介護している、多職種が関わっている、看護師だけがケア提供者ではないことが考慮されていた。また使用物品に限りがあること、30 分・60 分といった限られた時間内で効率的に実施する手順や優先順位を判断して実施していること、経済性を十分に踏まえてケア提供を行っていた。このことは清潔ケアの目的に加え、在宅の状況を踏まえて応用できる能力を身に付けているという事である。清潔ケアの場合、用いる物品は応用できることを教育の現場でも見せること、体験させることも重要であると考える。看護師は専門職として獲得した知識と技術をどの部分に使うのか、家族にはどこを任せるのか、など考えさせることも必要であると考える。

【結論】

清潔のケアにおける訪問看護師の看護技術のコアは【安全にケアを提供する】【安楽にケアを提供する】【効率性を考え様々な負担を減らす】【経済性を常に考慮する】【継続したケアができるようにする】の 5 つの概念であり、それは清潔のケアの本来の目的を達成することに加え、在宅特有の状況と療養の継続性を常に意識した看護技術であった。

	参加者の概要				
	性別	年齢	看護師経験年数	うち訪問看護経験	学歴
1	女性	41	16	1	専門学校2年課程
2	女性	44	10	4	専門学校3年課程
3	女性	42	20	1	短期大学
4	女性	56	30	7	専門学校2年課程
5	女性	58	38	22	専門学校3年課程
6	女性	47	26	21	専門学校3年課程
7	女性	59	32	18	専門学校2年課程
8	女性	48	27	11	専門学校3年課程
9	女性	49	31	6	専門学校3年課程
10	女性	55	29	13	専門学校3年課程
11	女性	51	23	16	専門学校3年課程
平均		50	25.6	10.9	
	表1				

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
安全にケアを提供する	利用者に危害を与えない	適温の湯やタオルを準備する
		声を常にかけて確認する
		皮膚に合わせて力を加減する
		体位を安定させる
		必要時人員を確保する
	感染予防の視点を持つ	清潔と不潔を区別する
		必要な防護具を用いる
		清潔不潔の区別を守るための手順を守る
安楽にケアを提供する	心地よさを大事にする	爽快感が得られるよう配慮する
		乾タオルで水分を取り湿ったままにしておかない
		保温を心がける
	尊厳を守る	身だしなみを整える
		露出を最小限にしてプライバシーを守る
		自分にされて嫌なことはしない
効率性を考え様々な負担を減らす	限られた時間を有効に使う	効率的なケアの順番と手順を考える
		物品を揃えて適切に配置する
		介護者の力も借りる
		利用者の身体的負担を最小限にする
		泡をぬぐっておいてから流す
	限られた空間を上手に使う	ベッドや家具の配置に合わせてケアをアレンジする
経済性を常に考慮する	経済的負担を考慮する	経済事情を把握している
		節約して物品を使う
		安価なものを選択する
		代用できるものは代用する
		家にあるものをできるだけ使う
継続したケアができるようにする	自立支援の視点を持つ	出来る事は自分でしてもらう
		対象者の自立度を知っている
	介護者の方法も尊重する	
	介護者の労力の軽減を図る	洗濯物をできるだけ減らす
		家庭に合わせたごみの分別廃棄を行う
	他職種とのすみわけをする	連絡を取り合ってケア内容を決める
		連絡ノートを使って情報共有を行う
		役割分担をする

看護技術；テクニカルスキル（手技）のことだけでなく、対象のニーズに合わせて必要なことを判断し提供するケアのすべて

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中村順子他
２．発表標題 多様な場で提供される看護技術のコアに関する研究Ⅰ-訪問看護師の清潔のケアに焦点を当てて-
３．学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤田　智恵 (FUJITA TOMOE) (30623251)	秋田大学・医学系研究科・助教 (11401)	
研究分担者	菊地　由紀子 (KIKUTI YUKIKO) (40331285)	秋田大学・医学系研究科・講師 (11401)	
研究分担者	長谷部　真木子 (HASEBE MAKIKO) (60241676)	秋田大学・医学系研究科・准教授 (11401)	
研究分担者	佐藤　亜希子 (SATO AKIKO) (70782861)	秋田大学・医学系研究科・助教 (11401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	杉山　令子 (SUGIYAMA REIKO) (80312718)	秋田大学・医学系研究科・助教 (11401)	
研究分担者	工藤　由紀子 (KUDO YUKIKO) (20323157)	秋田大学・医学系研究科・教授 (11401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関